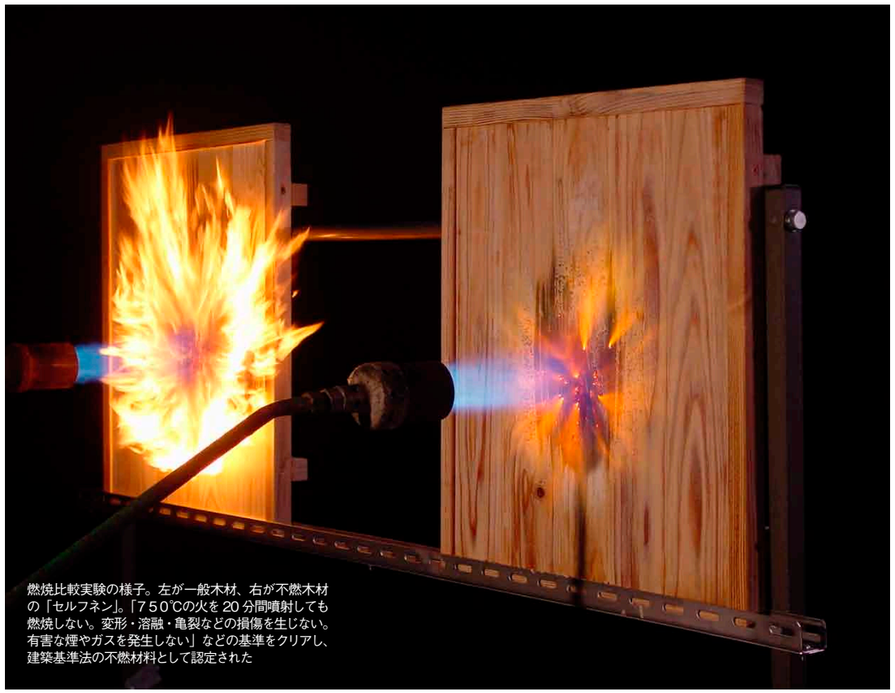
特集
常識を覆すものづくり

実現は無理だと思われてきた“ものづくりの常識”を覆した技術がある。多くが産業材や部品であるため、一般の人の目には触れにくい。しかし、実はこうした技術があって初めて、優れた工業製品が生まれ、また、作業効率を格段に上げ、安全を確保しているのだ。今号は産業の裏方として卓抜した価値を持つ技術に迫った。

取材・清水　高
山田清志
関根利子

木の文化を取り戻したい強い信念が〝燃えない木〟を生み出す

アサノ不燃木材
福井・坂井市



燃焼比較実験の様子。左が一般木材、右が不燃木材の「セルフネン」。「750℃の火を20分間噴射しても燃焼しない。変形・溶融・亀裂などの損傷を生じない。有害な煙やガスを発生しない」などの基準をクリアし、建築基準法の不燃材料として認定された

世界一厳しいといわれる日本の建築基準法。その中の防災基準で「不燃材料」として認められた〝木〟がある。福井県坂井市にある木材開発メーカー・アサノ不燃木材がつくった「セルフネン」がそれだ。木は燃えやすいという常識に正面から向き合い、不燃化を実現させ、建築物へのさらなる活用に結び付けたのだ。その根底には、「日本の木の文化を取り戻したい」という熱い思いがあった。

今までにないものを

近年、木造建築は廃れつつある。その理由の一つが、昭和25年に施行された建築基準法。「建築物の外部仕上げには不燃材料を用いる」ことが義務付けられており、鉄やコンクリート、アルミニウム、ガラスといった素材が指定されている。燃えやすい性質を持つ木は、もちろん指定外である。

そうした現状に疑問を持ったのが、アサノ不燃木材の浅野成昭社長である。

「木は確かに燃えやすいけれど、強度があります。鉄やアルミは高温で溶けるし、時間の経過とともに劣化しますが、木は千年だって持ちます。神社や仏閣など歴史的建造物がいくつも残っていることからも分かるでしょう。そんな日本の文化を支えてきた木を、もっと有効に活用したいと思ったのです」

浅野社長が〝木の不燃化〟という構想を思い描くようになったのは、平成10年ごろのことだ。

昭和58年に設立した浅野木材工業の経営者として、また建築家として、「木に生かされ、木を活かす」をコンセプトに掲げ、数々の木造建築やログハウスを手掛けてきた。仕事を請け負うからにはよりいいものを、と棟数よりも品質を重視してきた結果、いくつもの住宅コンテストで入賞し、「日本ログハウス・オブ・ザ・イヤー」を受賞するなど実績を積んできた。経営もまずまず順調だったが、50歳を迎えた年に「何か今までにないものをつく